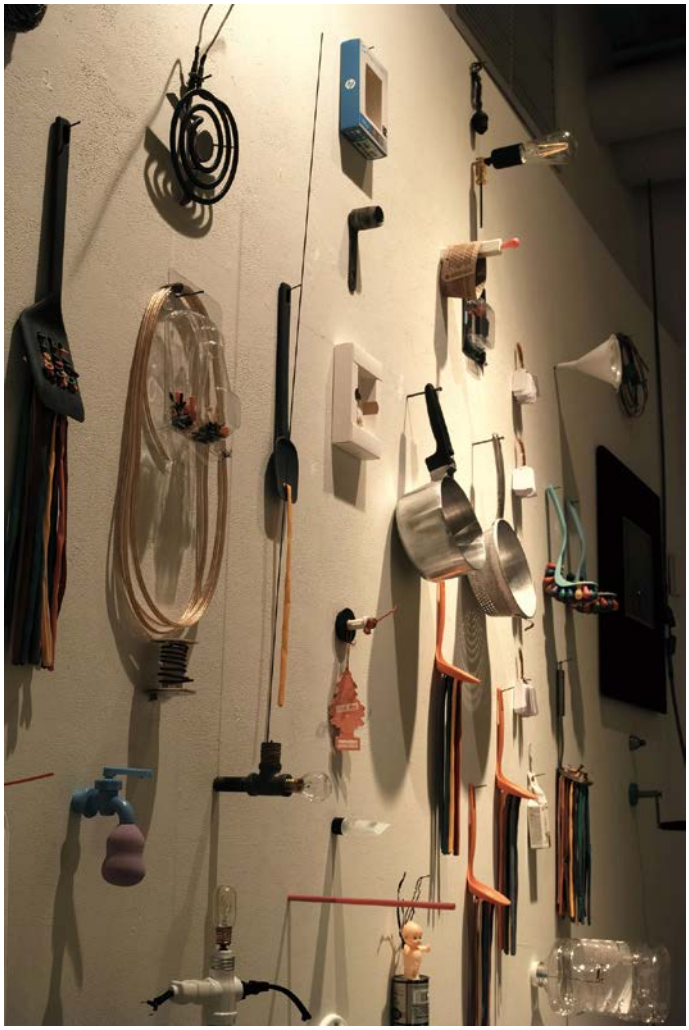
なごや文化情報

2021
Autumn

No.399

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／ギャラリーA・C・S
随想／華道石田流四代家元　石田巳賀さん
この人と…／清須市はるひ美術館館長　高北幸矢さん
視点／街には本屋が必要だ。個人書店の新たな挑戦。
#zoom up／ヴァイオリニスト　平光真彌さん



公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2021
Autumn

Contents

Pick Up Gallery　ギャラリーA·C·S ギャラリーエーシーエス…… 2
随想　いけばな展の楽しみ方
華道石田流四代家元　石田巳賀さん…… 3
この人と…　清須市はるひ美術館館長　高北幸矢さん…… 4
視点　街には本屋が必要だ。個人書店の新たな挑戦。…… 8
＃zoom up　ヴァイオリニスト　平光真彌さん…… 10

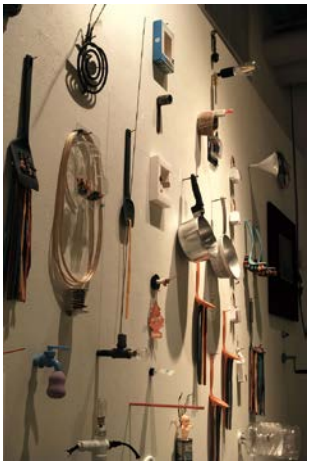
「なごや文化情報」編集委員
上野　茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
杵屋六春（長唄·唄方 名古屋音楽大学講師）
黒田杏子（ON READING）
鈴木敏春（美術批評·NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
濵津清仁（指揮者）
吉田明子（人形劇団むすび座 制作部長）

表紙

価値について 2019 LA
ー About value 2019 LA /（部分）

（2019年/可変/ミクストメディア）

自身が生み出したものがどのような意味や概念を表出するに到るのかは知らない。すべきことは、“美の感覚へと到達するかたち”を生み出すことに、ただひたすら向き合うことだと考えている。



神田毎実（かんだ つねみ）

1958年　島根県生まれ
1985年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
1997年　第26回現代日本美術展（東京都美術館,東京／京都市美術館,京都）
1999年　第84回二科展 安田火災美術財団奨励賞受賞
2018年　個展“価値について2018 変容と生成”（ATELIER·K,横浜）

現在、愛知県立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻教授、公益社団法人二科会彫刻部会員。

Pick Up Gallery

ギャラリーA·C·S　ギャラリーエーシーエス

「春のベストコレクション in A·C·S」の展示風景
（2021年2月～3月）

1989年4月昭和区いりなか交差点でスタートしました。小スペースのため、この地域の現代版画作家を中心に徐々に全国に作家の幅を広げました。

2005年夏に伏見に移転して16年、版画に加え現代美術の発信をサポートしています。

芸術の重要性が期せずしてコロナ禍により再認識されました。大好きな芸術に心を奪われる人たち、夢中で制作する人たち、大切な人生を芸術にかける人たち、そんな人たちに芸術の女神が微笑むことを心から願います。

生活の中に芸術を取り入れ、心豊かな日々を求めて社会が大きく動くことを、心から期待してギャラリーの運営を続けたいと思っています。

設　立　1989年　　オーナー　佐藤文子
住　所　〒460-0008　名古屋市中区栄1-13-4
　　みその大林ビル1F
電　話　052−232−0828

この地域の取り扱い作家　遠藤浩治、加藤美奈子、土屋敦資、増田舞子、山口雅英、山本近子、市橋安治　ほか

ウェブサイト　https://galleryacs.amebaownd.com/

随想

いけばな展の楽しみ方

華道石田流四代家元
石田巳賀（いしだみか）
華道家。G20愛知・名古屋外務大臣会合夕食会装花。愛知県「伎芸精髄 あいちのエスプリ」出演。
「日本・アルザス友好150周年記念」コルマール市長より表彰。
日本伝統文化を後世に繋ぐ活動に尽力している。

秋は文化芸術において、活気のある季節。いけばな界においても、華展（いけばな展）や花のイベントなど多くの催し物が全国各地で開催されます。なかでも私にとって名古屋市民芸術祭主催事業の名古屋いけばな芸術展、当方主催の石田流芸術展、日本いけばな芸術展が秋の三大行事です。それぞれ趣向の異なる展覧会で、いける側においては腕の見せ所です。名古屋市内で行われる華展で私が出品しますのは、名古屋いけばな芸術展と石田流芸術展。前者は、この地域のいけばな作家（大人）が流派を越えて季節の花を発表し、後者は、石田流の門下生（未就園児から大人まで）が毎年異なる趣向のテーマのもとで作品を発表するという特徴があります。

周知の如くいけばなは、花や木を用いて表現する芸術です。四季の植物がなくては成り立ちません。秋を代表する草花に、「秋の七草」というものがあります。

「秋の野に　咲きたる花を指折（およびを）り　かき数ふれば七種の花」（一五三七　巻八）

「萩の花　尾花　葛花　撫子の花　女郎花（おみなえし）　また藤袴　朝顔の花」（一五三八　巻八）

奈良時代の歌人、山上憶良（やまのうえのおくら）が、万葉集において秋の草花を選定したもので、このベスト7は今でも健在です。全てそろえていけることは難しいですが、作品の中に数種見つけることもできますので、華展で探してみるのも楽しいものです。

のんびりしていると「秋の七草」の見頃も一時。季節は、走り・旬・名残と緩やかに少しずつ移り変わってまいります。秋から冬に向かうまで、色とりどりの紅葉や草花、赤い実などが私たちの目を楽しませてくれます。まさに錦秋の季節。いけばなでは、草葉の長さや花の咲き具合、花材の取り合わせで細やかな季節を表現したり、さらに落ち葉や枯もの、旬の果物、木の実などを添えて趣向を凝らします。十五夜など行事の花も私たちの生活にメリハリと潤いを与えてくれます。季節の表現だけではなく、テーマを決めていける場合もあります。主題に合う花材や必要であれば花以外の物も使用し、その世界観を自分なりに作ります。例えばテーマが世界最古の長編恋愛小説『源氏物語』紅葉賀でしたら、どのような風景が浮かびますか?

いけばなは、室町時代から脈々と続いています。その原型は、日本の美しい風景から生まれ、神の宿る美しい山を枝物で、人々の住む豊かな谷を草花で表現します。四季の移り変わりをくらしの中で身近に感じられる各行事でも、植物が大切な役割を担っています。根底に蕾が花となり実となり新たに芽吹く姿を、人生観に見立てる哲学があります。芸術の秋、ぜひいけばなを楽しんでみてください。

この人と…

清須市はるひ美術館館長
高北（たかきた） 幸矢（ゆきや）さん

高北幸矢さんと筆者とは、随分と昔からの知人で、世代も同じ。いつも行動的で気迫に満ちた活動は同世代からも注目されてきた。1973年三重大学教育学部美術科卒業。同年、名古屋造形芸術大学（2008年に名古屋造形大学に改名）の前身である名古屋造形芸術短期大学助手から講師、助教授、教授を務め、2006年には名古屋造形芸術大学学長に就任。現在は退職され、清須市はるひ美術館の館長を務めている。長年グラフィックデザインの世界で活躍されてきたが、最近はインスタレーションの世界にも踏み込み、個展を中心に精力的に発表を続けている。

（聞き手：鈴木敏春）

自然豊かな環境で花に親しんだ幼少期

高北さんは1950年三重県名張市生まれ。名張市は、三重県西部、伊賀地方に位置する市で、伊賀盆地南端に位置している。周囲を山野や赤目四十八滝、香落渓（かおちだに）といった美しい自然が囲み、四季折々の鳥の鳴き声など自然の音を感じながら暮らすことができる。

高北さんは鉄工所を経営する家庭の次男として生まれ育った。後に花をモチーフにした作品を数多く手掛ける高北さんだが、それは「私の花好きは母からの贈り物です。小さな畑の片隅に様々な花を植えて、花が咲くたびに名前を教えてくれたことを覚えています」と語られるように幼少期の経験が影響しているのだろう。名張市内の中学校に進学したが、高校は進学校である三重県立津高等学校に入学。自宅からの通学に2時間もかかるために、高校2年生からは津市内で下宿生活を送った。大学への進学では当初、実学も兼ねて名古屋工業大学などの工学部を目指したが、実力不足を感じて断念。実家に金銭的な負担をかけないようにと、東京圏ではなく、近郊の公立大学を目指した。美術と生物が好きだったため、国立三重大学教育学部美術科と三重県立大学水産学部を受験し、どちらも合格。「美術の先生もいいかなあ」と、教育学部美術科を選択した。

大学では教員になるため、アートを中心に様々な専門分野を学んだ。周囲の友人は洋画などの専攻が多かったが、高北さんは、デザイン以外には食指が動かなかったとのこと。特にグラフィックデザインに魅力を感じたが、デザインを担当する教授はプロダクトデザイン出身だったので、グラフィックデザインは独学で勉強することになる。「この時に養った自力で探求するスタンスが、その後の活動に大いに役立っていると思います」と高北さんは語る。

教員資格を得るための必修科目に興味が湧かなかったため、教員の道は選ばなかった。職業選択に際しては、「“できないこと”や“やりたくないこと”を消去していき、“残ったものをやる”ことに賭けました」。結果、辿り着いたのが、グラフィックデザイナーの道であった。

名古屋造形芸術短期大学に採用、指導者の道へ

グラフィックデザイナーとして生計を立てることを夢見て、大阪万博などの仕事で当時から有名だった工芸会社の「丹青社」などを受けるも不採用。名古屋造形芸術短期大学の助手に応募し、見事に採用試験に合格。ここで、大学時代に養った独学経験が大変役に立つこととなる。名古屋造形芸術短期大学にはアート、デザイン、建築、芸術理論といった様々な分野の教授がいて、どの分野も興味深かった。時間に余裕をみつけては読書、ギャラリーや美術館巡りなどに時間を費やし、率先的に学んだ。「特に“現代美術”という分野を知った時の衝撃は大きかったですね。写真も助手時代に大いにのめり込みましたが、カメラ代に費やす資金も大変だったので、断念しました」とのこと。しかし当時の経験はその後の活動の大きな糧となったと、高北さん。

デザイン活動の広がり

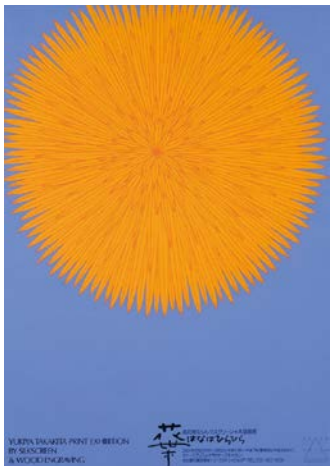
高北さんは、ポスターデザインのプロフェッショナルというイメージが強いが、そのきっかけは1973年から1985年にかけて抽象造形表現を核として取り組んだ、タイポグラフィな作品の制作だった。1977年には高北デザイン研究所を開設し、大学の職務とデザイナーの二足の草鞋をはくこととなる。

都市の増殖体シリーズより「CHANGE」(1992年)

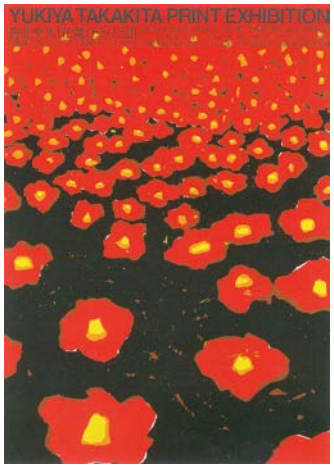
1985年頃から1995年には、表現にメッセージ性を絡ませた「都市の増殖体シリーズ」を制作し好評を得る。道路の割れ目に芽吹く草や、小さな虫といった都市に存在する小さな動植物の生命に慈しみの目を持ち、増殖していく様のイメージを追求した作品の数々である。その作品が中学校の美術教科書に掲載されたことについて、高北さんは「とても嬉しかった」と振り返る。

取材時に「都市の増殖体シリーズ」が掲載された教科書を前に来し方を振り返る高北さん

その後、「都市の増殖体シリーズ」に込めたメッセージ性を継承しつつ、草をイメージする作品を集中的に制作した。コンピューターによる表現活動がデザインの世界でも普及し、精度の高い手描き表現が行えるようになった2000年代に入ると、木版画表現や葦ペンによる手描き感覚を重視した表現活動に移行し、より具体的に植物を表現するようになる。散る、落ちる、離れる、終わることなどをより強く意識した表現活動を現在も続けている。



「はなはひらひら」(2001年)

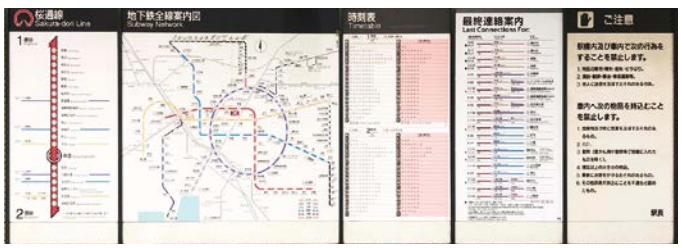


「花葉ひらひらⅡ」(2003年)

グラフィックデザインの世界ではイラストレーターを目指す人が多かった。だが高北さんは、「人がやらないことをやればトップになれると思ったんです」という目論見から、サインシステムデザインの仕事に早くから取り組んだ。サインシステムデザインはグラフィックデザインの中でもかなり工学系の仕事で、もともと理系志望だった高北さんにはうってつけの仕事だったのではないかと筆者も拝察する。

高北さんの仕事は今も愛知県内のいたるところで目にすることができる。名古屋市の地下鉄のサインシステムデザインはその代表的なもので、1989年に開催された世界デザイン博覧会にあわせて開業した桜通線の工事と並行するかたちで行われた。「地下鉄全線のサイン見直しのマニュアルはB4サイズで100ページを超える大作でした。また、みよし市の三好ケ丘サインシステムデザインは都市景観形成も合わせたデザインとなり、三好ケ丘内4カ所に設置したカリヨン（組鐘）には、サインモニュメントとしての役割を与えつつ、オリジナルのメロディによるサウンドサインも導入しました。半田市のサインシステムデザインは、半田市景観アドバイザーとして25年間携わっている仕事で、長期に渉るものはメンテナンスも手掛けています。サインシステムデザインは時代に促して追加や変更を伴うものですので、メンテナンスは極めて重要です。企業にマークやロゴタイプなどを提案することも多いですね」と高北さん。

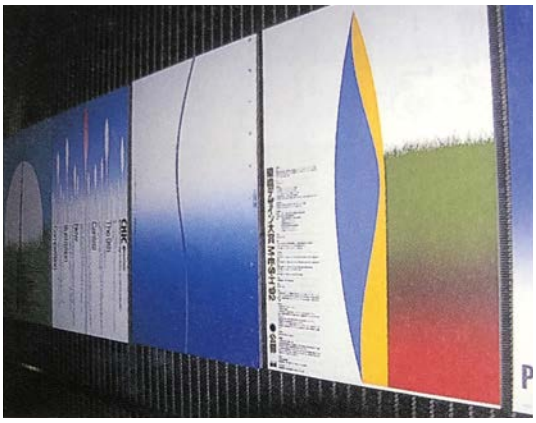
この地方のグラフィックデザイン界の先駆者である高北さんだが、コンピューターの発達とともに、デザインの分野は十分に成熟したという見解を示している。「デザインには見るべきものはもはやないと思っています」と語られたのは意外だったが、それは新しいものにチャレンジする精神の表れでもあるようだ。



名古屋市交通局の地下鉄サイン計画（1989年）

みよし市の三好ケ丘に設置されたカリヨンの一つ（1991年）

様々なサインシステムデザインを手掛けた高北さんは、デザイン専門ギャラリーであるスペースプリズムギャラリーの開設や、NHKウィークエンド中部のレギュラーコメンテーターを務めるなど様々な活動にも精力的に取り組んでいる。2000年にはそれまでの多忙な日々が影響し、腸閉塞など様々な病を併発して体調を崩すものの、健康の回復に努めながら活動を続け、2005年にはスペインのバルセロナにて個展を開催し、2006年には名古屋造形芸術大学の学長に就任する。



バルセロナでの個展とレセプション風景（2005年）

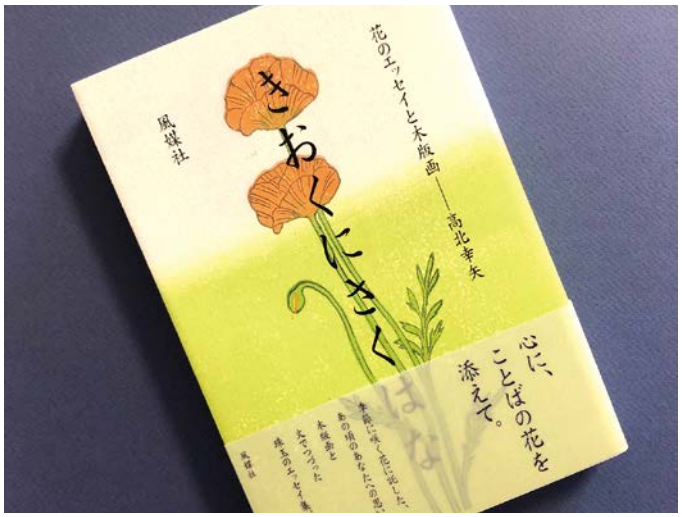
名古屋造形大学の卒業制作展にて

それまでの大学運営の在り方に課題を見い出していた高北さんは、精力的に改革に取り組み、大変多忙な日々が続いた。その影響もあって、高北デザイン研究所の運営は滞り、スペースプリズムギャラリーも妻の章子さんに委ねることになる。そして2012年、再び体調を崩したため、「名古屋造形大学を早期退職して、大好きなアート活動に専念することにしました」と当時の心境を語られた。同年、清須市はるひ美術館館長に就任。教育プログラムの一環として月1回開催している館長アートトークは、2021年4月に100回を迎えている。

館長を務める清須市はるひ美術館にて（2021年）

花に心を寄せて

高北さんは、名古屋造形大学の学長を務めていた2008年の11月に学校所在地の小牧市文芸協会から依頼を受け、同協会が毎月発行している郷土総合文芸誌『駒来（こまき）』の表紙絵として木版画作品を提供することとなった。それぞれ発行月の季節にふさわしい花をモチーフに選び、作品を提供する活動は、まさに学長自らによる地域貢献だった。「10年にわたって表紙を飾った木版画作品116点と、その花にまつわる思い出を綴ったエッセイを1冊の本にまとめ、2019年1月に『きおくにさくはな』（風媒社）として出版しました」。高北さんの手によって、優しい色彩が与えられた花々は、見る人に生命の持つ力を届けてくれるかのようだ。



『きおくにさくはな』（風媒社）

開花するファインアートの世界

デザインの世界にもコンピューターが導入されて、「画一的なデザインや慣習にとらわれたような安価な価値観の作品が多くなったように感じます」と語る高北さんは、それを打破すべくファインアートに関心を向け、発表を続けている。

インスタレーション（古川美術館分館為三郎記念館 2019年）

1972年から2021年にかけて、東京や名古屋のほか、スペインや台湾、アメリカなど国内外にて66回もの個展を開催。2012年に古川美術館分館為三郎記念館にて開催した個展「高北幸矢インスタレーション　落花の夢」を契機にインスタレーションに力を入れている。落花する椿の花の「生と死」を自らの信条に照らしたこの個展は見事に開花し、2013年同館での「落花夏の夢」、2017年の三重県鈴鹿市の椿大神社社殿での「落花、奉納」、2019年「落花、未終景」の開催へと結実している。

探求心の尽きない高北さんの今後の活動にも注目していきたい。

Report 視点

街には本屋が必要だ。個人書店の新たな挑戦。

本は読むひとの世界を広げ、心を育ててくれる。しかし1990年代後半にピークを迎えた出版業界全体の不況は止まらず、全国の書店の数は20年前と比べると半減しているという（※1）。ここ名古屋でも、駅前に必ずひとつはあった書店がここ数年で軒並み閉店してしまった。しかしそんな状況にも関わらず、今年に入り個人経営の書店が続々とオープンしている。きっかけは何だったのか。それぞれの店主に想いを聞いた。

（まとめ：黒田杏子）

本屋に行く習慣を取り戻したい

2021年1月、金山駅近くの沢上商店街に開店した「TOUTEN BOOKSTORE」。元時計店を改修した店舗に、雑誌からコミックまで幅広いジャンルの新刊書籍約3000冊が並ぶ。店主の古賀詩穂子さんが大学卒業後に入社したのは、出版流通を担う取次会社。書籍業界を取り巻く厳しい状況のなかでも、書店員が丹精込めて作り込んでいる書店に魅力を感じたのだという。古賀さんは「毎日担当する書店に足を運ぶうちに、ひとつとして同じ本屋っていうのはないんだと気付いたんです。どれだけ数字やデータでの管理が進んでも棚にはすごく人の癖が出る。それが面白いと思いました」と振り返る。ただ当時の仕事では、書店の客数や売上を直接的に増やすことはできず、もどかしさを感じていたという。

「どんなに疲れていても、書店にいるととても癒されました。こういう、いい意味でほっておいてもらえる場所が減ってしまうのは嫌だなと思いました」と次第に、自分自身で本屋を経営してみたいと思うようになった。開店して半年経った今の感触を聞くと「やっぱり利益は少ないですが、なんとか続けていくことはできるんじゃないかな」とのこと。まずは本屋に行く習慣を取り戻してほしいとの想いから、店舗ではコーヒーやビールを飲むこともでき、ヨガや英会話など様々なイベントも常時開催。“本を買う”以外の目的での来店も歓迎している。また、古賀さんにはもう一つやりたいことがある。自分が身につけたノウハウを広く情報発信して、全国に本屋をやりたいという人を増やしていくこと。個人書店の経営はまだまだ不透明なことも多く、各々の力量に依るところが多いのが実情だ。「起点は絶対多い方がいい。さまざまな壁がなくなれば、全国各地に本屋ができると思う。まず自分でやってみて、わかったことを伝えていきたい」。

TOUTEN BOOKSTORE

TOUTEN BOOKSTORE 店内風景

自分なりの方法で本屋ができる道を探して

瀬戸市の「本・ひとしずく」は2021年5月に開店。店主の田中綾さんが一目惚れしたという築100年を越える古民家に、閉店した書店の棚や譲り受けた古い家具を集めて店を作った。小さい頃から本が好きだったが、子どもが生まれてからはゆっくりと読書をする時間がなく、子育てがひと段落して本と「再会」し、改めてその魅力に気付いたという。そんな時に、ブックコーディネーターの内沼晋太郎さんが書いた『これからの本屋読本』（NHK出版）に出会う。「カフェの一角で小さなコーナーを持つだけでも、イベントに出店するだけでも“本屋”だ、と書かれていたのを読んで、自分なりの方法で本屋ができる道があるんじゃないかと思ったんです」とのこと。

商品構成は新刊書籍が6割、古書が4割。また、一般の本好きが本棚を借りて手持ちの古書を販売できるスペースもある。「ここに置いてある本を入り口に、さまざまな世界を知ってもらえたら」と田中さん。本と人をつなぐだけでなく、読書会や講座など店内でのイベントを通して、人と人をつなぐ場所になることを目標としている。

本・ひとしずく

子どもたちに手渡したいもの

「メルヘンハウス」は45年の歴史を持つ子どもの本専門店。2018年に惜しまれつつ閉店したのだが、先代のご子息で二代目の三輪丈太郎さんが2021年8月に新店舗を開店した。復活の場所に選んだのは、覚王山の参道から少し入った古いアパートメントの一室。以前のメルヘンハウスは、60坪の店舗に約3万冊の絵本が並んでいたが、新店舗では厳選した100タイトルを扱う。メルヘンハウスが大切にしてきた定番の絵本に加え、その時々で“旬”だと思うテーマを定めて入れ替えていく。「メルヘンハウスのマインドを継承しつつも、時代にあった店舗のあり方を模索しています」と三輪さん。

閉店してからの3年間、講演会やイベント出店など様々な場所で絵本を求める人と出会った。それでも「やっぱり現場がなければ」と思ったという。

「子どもたちに本を手渡していきたいっていうのは自分のなかの社会活動なんです。子どもたちにどれだけ余白を持たせられるか。今は分刻みで塾に行ったり習い事をしたりで、ぼーっと考える時間がない。こんな時代だからこそファンタジーの力が必要だと思います。このままでいいの?っていうハテナを子どもたちにいっぱい渡したいんです」。

メルヘンハウス

多様性を伝える本屋を

名東区の西山本通にて、2021年10月に開店する「Reading Mug」は洋書と和書の古書を扱う。店主のキムラナオミさんは、ブックマークナゴヤ（※2）の古本市出店やカフェなどでのポップアップショップを経験し、本を販売する楽しみを知った。また、10年前に訪れたイギリスで本屋巡りをした際、独立系書店が街のコミュニティになっているのを肌で感じ、本屋を志すようになったという。3年前に始めたオンラインショップでは、海外の絵本を中心に、英語や海外の暮らしに興味を持てるような本を紹介している。実店舗をオープンするのは、近くに小学校があり子育て世帯も多いエリア。「子どもたちに多様性を伝える本屋をやりたいですね。“多様性”は最近よく言われている言葉ですが、現実にはなかなか理解できていない。親ではない大人だからこそ、日常的に伝えられることもきっとあると思う。今後は英語の本だけでなく、ヨーロッパやアジア、アフリカ、南米などの本も増やし、子どもたちにさまざまな国の文化と言語に触れてほしいです」。

次世代の本屋のために種をまく

岐阜市の古本屋、徒然舎が主催する『小さな古本屋講座』が2021年6月から、全8回の予定で毎月1回開催で始まった。2020年秋に登壇したトークイベントで、来場者の2割が「いずれ本屋をやりたい」と手をあげたことが大きなきっかけになったという。徒然舎は夫婦で営んでいるが、夫の藤田真人さんは名古屋市天白区の古書店、太閤堂書店の二代目でもあり名古屋古書籍商業協同組合の理事も務めている。かねてから同世代の古本屋が増えないことを寂しく思っていた藤田さんは「相談できる場所が身近になく、興味があっても諦めてしまう人が多かったんじゃないか。我々にできることがあるのでは」と今回の講座を企画した。初回は20～40代の20名が集まった。

妻の深谷由布さんは「私自身もそうですが、会社が合わなくて転職を繰り返すうちうちに古本屋に辿りついたという人も多いんです。古本屋は、古物商の許可さえ取れば、始めるのに資格も試験も必要ない。わらしべ長者のように少しずつ大きくすることができるし、古書組合というセーフティーネットもあるので、大儲けはできないけど大きく損をするリスクも小さい。無理のない仕事という意味では、今の時代にはあっているのかな」と話す。

講座の内容は、徒然舎のこれまでをベースにしたかなり実践的な内容だ。「今は種をまいている状況。ひとつでもふたつでも新しいお店が出来てくれたら。仲間が増えればみんなでやれることもあるし、次世代が育てばさらに地域の文化は活性化すると思う」。

徒然舎　小さな古本屋講座

今回、お話を伺った皆さんが共通して語っていたのは、本をとりまく状況や地域の未来のこと、子どもたちや次世代の本屋についてのこと。この20年で失ったものはもちろん大きいが、よりよい未来は自分たちでつくっていくしかない。

筆者自身、小さな書店を名古屋で15年営んでいる。そこで実感することは、多かれ少なかれ、すべての本屋は社会活動の側面を持つということ。本を手渡すことは文化のバトンを渡すようなものだと思う。小さな芽が育ってやがて大きな森となり、この土地の文化を肥やしていくことができると、個人書店主は信じている。

※1　書店調査会社アルメディアの調査資料（2020年）より
※2　2008年から2017年まで名古屋で開催されたブックイベント。現在は後継イベントとして毎秋に円頓寺商店街にて古本市「円頓寺　本のさんぽみち」が開催されている。

#zoom up ズーム・アップ

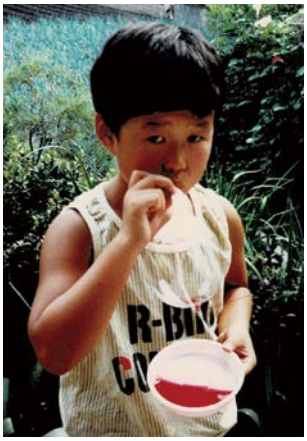
ヴァイオリニスト
平光（ひらみつ） 真彌（しんや）さん

中部地方を中心に精力的に演奏活動を展開しつつ、愛知県立芸術大学の非常勤講師を務めるなど、多忙を極める平光真彌さんにズームアップ。中部フィルハーモニー交響楽団第75回定期演奏会へのエキストラ出演直後のインタビューとなり、興奮さめやらぬ雰囲気の中、お話を伺った。

（聞き手：濵津清仁）

4歳で「悲愴」を指揮！？

真彌さんは1980年、岐阜県各務原市生まれ。クラシック音楽が溢れる家に生まれた真彌さんが、音楽を始めたのは自然なことだった。すでに4歳でヴァイオリンを習いはじめ、自宅で流れていたチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」に合わせて指揮棒を振っていたという。



幼い頃の真彌さん

それには何といっても父の、ピアニスト、作曲家、指揮者である平光保さんの存在が大きかった。当時、保さんはナゴヤシティ管弦楽団（現・セントラル愛知交響楽団）の常任指揮者を務めており、真彌さんは「オーケストラのメンバーが家に出入りすることも多く、小さい頃からたくさんの刺激を受けました」と語る。

高校は父の母校である岐阜県立加納高校音楽科に進学した真彌さんだったが、元々は理数系への進路を考えていた。そのことを父に話したところ、返ってきた言葉は「お前は、音楽の方じゃないのか？」。このひと言が背中を後押しし、父と同じく愛知県立芸術大学に進学することとなった。

大学に入り、音楽に本格的に取り組むようになった真彌さんは、同期の学生との弦楽四重奏やヴァイオリンソナタなどの二重奏、大アンサンブルであるオーケストラなど、高校までは少なかったアンサンブルの機会に恵まれた。「音楽に興味はあったのですが、それまでは一人だけの世界で、とても視野が狭かったと思います。でも、いろんな地域から集まる大学では先輩や後輩、同級生から様々な刺激を受けることが多く、少しずつ視点が増えていき、結果的にアンサンブルの楽しさ、奥深さを体感することができました」とのこと。

ベートーヴェンの作品を仲間と探求する楽しさに目覚めたのも、こうしたアンサンブルの経験からだった。以後は、ベートーヴェンによる弦楽四重奏曲の全曲演奏を自らの活動の主軸に据えることとなる。

プロとして活動を開始

2019年 弦楽四重奏曲の演奏（呉市つばき会館音楽ホール）

2005年に愛知県立芸術大学大学院を修了し、中村桃子賞を受賞。第11回日本クラシック音楽コンクール第3位、第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクールでは第1位、併せて聴衆賞、オーナー賞を受賞する。また、2007、2010、2012年には長野県で開催された小淵沢室内楽セミナーに参加し、東京藝術大学教授を務めていたヴァイオリニスト・故 岡山潔さんから薫陶を受け、ハイドンやベートーヴェンといった古典派の作品を研究した。そこで最優秀カルテットとして「緑の風 音楽賞」を受賞し、さらに2012年には講師特別賞の同時受賞を果たす。

また、大学院修了前後から、岐阜や名古屋でフリーランスとして活動を開始し、名古屋フィルハーモニー交響楽団やセントラル愛知交響楽団など東海地区のオーケストラにもエキストラとして出演するようになる。また2000年から父の保さんが音楽総監督、指揮者を務めるウィーン岐阜管弦楽団にてコンサートマスターを務め、親子共演を果たした。さらに、

2004年から2021年にかけて、愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務め、神戸室内合奏団などの客演コンサートマスターに招へいされるなど、活動の幅を広げている。

ライプツィヒでの体験と活動の多面性

真彌さんは、「大学院修了後、3年程経った頃に約3週間、海外へ一人旅をしました。この時の経験が、現在の活動のルーツのひとつになっています」と語る。バッハ音楽祭に合わせて赴いたライプツィヒでは、現地在住の友人のつてを辿って音楽大学の先生からレッスンを受けたほか、コンサートにも積極的に足を運び、見聞を広げて、現地の生活の匂いを感じることに努めた。「短い期間でしたが、自分の演奏している音楽が創られた土地の空気感は絶対に体感しなければならないと感じました」と真彌さん。加えて、ライプツィヒやプラハでのストリートパフォーマンスを体験したことが、名古屋市が実行委員会を編成して運営する「Nagoya POP UP ARTIST」での街頭パフォーマンスへの意欲に繋がっていると話す。

真彌さんの活動の核となるのは、自らのライフワークに位置づけた、16曲あるベートーヴェンの弦楽四重奏曲の全曲演奏への挑戦である。残すところあと数曲とのことで、2021年3月には、長久手市主催ベートーヴェン生誕250年記念「ベートーヴェンの核へようこそ！」3回シリーズの最終回にて、ベートーヴェン晩年の最高傑作である弦楽四重奏曲第14番を演奏した。第14番はベートーヴェンの弦楽四重奏曲の中でも他の追随を許さない頂点に君臨する名曲で、今もなお燦然と輝いている。ここまで来たら、全曲演奏の完結は目前と、筆者もワクワクしている。

真彌さんの真骨頂であるクラシックだけに留まらず、音楽に多面的に挑戦されている点も興味深い。長久手市文化の家で2004年から隔年で開催されている音楽イベント「おんぱく」では、2014、2016、2018年とプロデューサーを務めたほか、豊川市内の小学校へのアウトリーチで演奏するなど、裾野を広げる活動をしている。今年の7月には長久手市文化の家にて、同じ「平光」姓のジャズピアニスト・平光広太郎さんと「夜の実験室 ジャズとクラシックのあいだ」にて演奏を繰り広げた。

2019年 豊川市内特別支援学校へのアウトリーチ

おんぱく2016にて 左端が真彌さん（長久手市文化の家）

さらには、ヴィオラとコントラバスと共に、様々なジャンルを演奏するCool MensLa（冷やしメンズラー）を立ち上げ、海外一人旅で経験したストリートパフォーマンスを日本でも実現したいという思いから「Nagoya POP UP ARTIST」オーディションにも参加し、見事にパフォーマーに認定された。その時筆者もオーディションの審査員であったが、圧倒的な実力で見事なパフォーマンスであったことを鮮明に記憶している。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受ける中で開催された「Nagoya POP UP ARTIST　ショーケース・ライブ in今池駅」では、アイリッシュやロシア民謡などを演奏したが、真彌さん達も「久しぶりの演奏で嬉しかったです。涙を流しながら演奏を聴いてくださったお客様がいらっしゃったのが、とても心に残りました」と語ってくれた。

2021年 Cool MensLaの仲間達と（5/R Hall&Gallery）

真彌さんの多岐に渡る活動を通じて、様々なジャンルから主軸としているクラシックに取り入れられるもの、さらにはその逆を追い求めているのが印象的であった。2021年には愛知室内オーケストラのコンサートマスターを離れ、これからも真彌さんの挑戦は続く。今後も目が離せない。

わたしの寄附で、土を耕す。　わたしの寄附が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ
名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内　名古屋市文化基金　検索

名古屋市

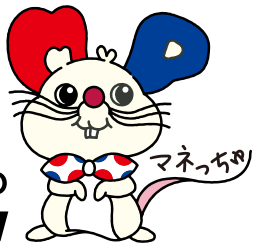
頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容
①舞台の企画・制作マネージメント
②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング
④舞台・イベントの運営



MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095　FAX:(052)508-5097　Web:www.mane-pro.com　E-mail:mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社

令和3年9月25日発行（年4回6・9・12・3月の25日発行）通巻399号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP https://www.bunka758.or.jp/